

主張 科学の進歩と医療の将来、このままで良いのか

1970年、大阪で開かれた万国博覧会（以下「万博」）は日本の高度経済成長と東京オリンピックの成功に自信を深め、全ての日本国民が日本の将来を確信していた時期に開催された。そして、この大阪万博の主要テーマは「人類の進歩と調和」であった。

人類の進歩は万博の前年度にアポロ11号の月面着陸の成功などもあり、科学の発達は人類の将来に夢と希望を与えるものであった。さて、40年以上経た現在はどうであろうか、原発の事故など科学の信頼が失われつつある中、科学の進歩は何をもたらしているのか、遺伝子組み換え、原発、IT、臓器移植、ロボット手術、重粒子線・中性子線癌治療、最近では3D技術、iPS細胞など数え上げれば数限りない科学の発達が認められる。科学の発達は人類に恩恵をもたらした反面、負の要素も生じていることに目を背けてはならない。この負の要素における医療の問題を取り上げてみる。医療技術の発達はあまねく人類の医療に貢献出来る筈のものである。

ごく最近であるが、複数の大学医学部のノバルティス・ファーマ社の降圧剤（ディオバン）のデータ捏造事件が世間を騒がせた。これは利益追求がもたらしたものと思われる。薬品のみならず医療技術・機器の開発にインセンティブを与えるものが崇高な倫理観と博愛であれば良いが、利益追求が少なからず認められるのが現実である。

政治が絡む問題では、日本の行き詰まっている経済成長のカギの一つが、将来、世界で520兆円とも言われる医療産業にあるとして、重工業、家電、自動車産業など大企業から中小企業まで、医療機器の開発製造の参入を歓迎し、安倍政権も経済成長戦略として、国内各地に医療特区を設け、経済界が歓迎する混合診療解禁の地ならしをしつつある。

医療には経済界の力も必要であるが、利益追求型の参入を安倍政権の目論むような形で許すならば、国民皆保険制度の崩壊につながりかねない。

不妊治療の問題も最近話題になってきており、精子バンクが誕生したのは1964年アイオワ市と東京である。精子提供による人工授精によって誕生した子どもがすでにアメリカでは100万人を超え、日本では2万数千人に上り、50歳を超える人も出ており、父親が実の親でなかったことを知り、親子の関係に亀裂が生じてきていることが報道されている。また、倫理的な問題として、優生学や人種差別の問題も取りざたされるようになってきている。

神の領域まで踏み込んだような遺伝子の組み換えや遺伝子診断による子供の産み分けなど、果たして人間は将来人間性を失わず生きていけるだろうか。このような危惧を取り越し苦労だとか、杞憂に過ぎないとか言われればそれまでである。しかし、医療団体として全ての医療の恩恵を全ての人に、公平に分ち合うという理念を持ち続けるためには、遺伝子操作がどこまで許されるのか、人間の寿命に関与することがどこまで許されるのか、また、医療技術の開発と実用化は自然の生命観を重視し、政治的関与も含めて、貧富の差別無く、誰でも享受できる倫理的にも普遍性を持ったものに限られるという、社会的制約が必要であることを主張する時が来ているように思われる。